

peer support net  
Shibuya

子ども・若者の  
育ちに関わる  
地域の「おとな＝市民」が  
担い手となって

NPO法人 ピアサポートネットしぶや



独立行政法人福祉医療機構  
社会福祉振興助成事業

この冊子は、独立行政法人福祉医療機構 令和6年度（補正予算）  
社会福祉振興助成事業の支援を受け実施しています

# はじめに



売り手市場なのに就活に振り回される大学生、高校生世代と相まってこの世代の自殺が増加傾向と報道されています。勉強会やピアサポートを通して若者と向き合い、彼らの声を生で聴きしんどさに共感し「孤独・孤立に向き合うとは？ 居場所につながるとは？」を追い求めた1年間でした。

私たちおとなは、彼らのなかにどれだけ慣れ親しんだ顔見知りとして映っているだろうか？ しんどい時に頼ってもいいと思えるおとなののだろうか？ 自問自答の日々でした。その葛藤を早期対応の大事さ、育ちに寄り添う「おとなの話」として記録しています。

第1部は、不登校・ひきこもりの子ども・若者と保護者への寄り添いの事例です。2025年度に、厚労省のひきこもりガイドラインが「自立から自律へ」と変わったこともあって、寄り添うことの意味を問われた年でもありました。不登校・ひきこもりは、誰にでも起こりうる状態と言われながらも、ネガティブにとらえられがちな空気感があります。関わる側には、親同士であれ同世代の若者同士であれ、対等な「一個の人間」として対峙する人権感覚が求められました。

○ ピアサポーターによるアウトリーチでは、さまざまな理由で関係のなかに身を置く難しさのある子ども・若者に外出同行や、自宅等訪問をします。医療機関と連携するケースが多く、関係づくりには長い時間が必要です。

○ 保護者は、ひきこもるわが子の対応に苦しみ、社会に潜む偏見や差別にさらされる当事者です。親が自分を見つめ直し子どもとの距離感を獲得するヒントは、親同士の語り合いの中にあるようです。

○ 大学生と中学生、校内居場所には、ナナメの対等な関係が生まれています。学習や遊びのなかで、自分の体験を語ることが近づくきっかけになっています。

○ ひきこもり状態の早期発見・対応には、行政の垣根を超えること、地域に多様なつながりをつくることが課題です。今年度は、近隣区の行政や社会福祉協議会と、事例に基づくミニ勉強会で情報を共有し、次への足がかりとしました。

第2部は、子ども・若者の育ちに寄り添う「おとなの話」です。子ども食堂・冒険遊び場・校内カフェ・不登校、ひきこもり支援という活動内容やスタイルの異なる4団体のユニットが、それぞれの活動に合わせて勉強会を通して情報共有を進めました。

学校、PTA、民生委員、青少年委員など、近所の「おとな＝市民」と合わせて近隣区を含めた行政、社会福祉協議会、企業等とのつながりが生まれました。

○ ミニを含めて6回の勉強会、行政や団体の垣根を超えて、取り組みの事例が語られました。「寄り添うということ」「支援に現れる支援臭」「あいまいさの共有」「自律＝対等性」などなど、10代に関わった「おとな」の語り口のなかには、多くのヒントがありました。

○ 原外カフェのある中学校に近い、コミュニティセンターとの協働で近所のおじさん・おばさん力を生かし、「10代のよりみちスペース」がオープン。10代の若者にとってユニバーサルな居場所とは？ 試行錯誤が始まりました。

○ 食を通じて地域とのコミュニティづくりを目指す子ども食堂「みんなの世界テーブル」、民生委員を中心にした中学生の放課後居場所「原外カフェ」、近所のおじさん・おばさんと若者プレーリーダーで四半世紀も続く「せせらぎファンイン冒険遊び場」—それぞれの活動には「子どもを放っておけないと思うおとな」が出入りしています。

○ 地域共生社会を目指し、生徒会と地域のおとなが取り組んだ「原オリンピック」も2年目を迎えました。今年度はデフオリンピック開催と合わせ、さらなる地域共生を目指して取り組みが広がっています。

こども家庭庁は、令和7年度第2期居場所部会の方向性として「中高生以上の子ども・若者のユニバーサルな居場所の意義・役割」を示しています。私たちも課題を整理し、ともに行動する仲間をさらに増やしたいと考えています。

特定非営利活動法人 ピアサポートネットしぶや  
理事長 相川良子



はじめに .....	1
1. 若者世代のひきこもり等に 向き合うピアサポート .....	4
長いひきこもり、子ども・若者の辛さに早く気づく .....	5
ピアサポーターの対等性を足場に、自律に向き合う ～関わりを続けること、人と人をつなげること .....	7
親の自律について .....	9
早期対応を支える公立中学校の 放課後居場所等と大学生ピアサポーター .....	11
重層的支援事業からひきこもり支援に取り組む ～地域福祉コーディネーターの記録 .....	13
Column 行政の垣根を越えて .....	15
2. 子ども・若者の育ちに関わる「おとなの話」 .....	16
ミニ勉強会と組み合わせた6回の勉強会の記録 .....	17
プレ事業「10代のよりみちスペース」から見えたこと .....	20
みんなの世界テーブル活動報告 子ども・若者を育む ～地域のおじさん・おばさんにできること .....	21
公立中学校の校内カフェを支える 「まちのおじさん・おばさん」 .....	23
せせらぎファンイン・冒険遊び場に伴走した おとなと若者の四半世紀 .....	25
地域とともに育つ「第3の居場所」 ～原外カフェが紡いだ物語 .....	27
3. 課題を探る .....	29
おわりに .....	31



# 若者世代の ひきこもり等に 向き合うピアサポート

子どもからおとなへと成長する過程に、  
「思春期」があります。  
寄り添うことの大切さ、そして難しさを、  
それぞれの立場から考えました





## 長いひきこもり、子ども・若者の辛さに早く気づく



ピアサポーター/ 介護福祉士 辻本 敏也

### ひきこもりの始まりは

ひきこもりの相談を受けていると、「きっかけのような出来事はあったが、気づいたら何年も経っていた」というご家族の声を耳にします。もちろん、そこには必ず理由があります。当法人に寄せられる相談の多くは、すでに長期化したケースです。親御さんが「もう自分たちだけではどうにもできない」「誰かに頼るしかない」と思い、勇気を出して連絡をくださる状況で、相談に来られるお子さんの年齢は20代が中心です。そこから逆算すると、ひきこもりの始まりの多くは小学校高学年から中学生頃になります。

### 子どもからおとなへの移行が難しい

この時期は、心も身体も大きく成長するタイミングであり、学校生活、友人関係、部活動、家庭環境、学習状況など、さまざまな要因が重なりやすい時期でもあります。何か問題が起きていても、おとなから見ると「思春期だから」「反抗期だから」と片づけられてしまいがちです。実際には、子ども自身が工夫をすることで問題を乗り越えていることもあれば、一方で静かに限界を迎えていることもあります。

### 迷惑をかけてはいけない心理

この時期に、子ども自身では解決できない大きなつまずきを経験すると、登校をしぶったり、友人関係で孤立感を覚えたり、家庭の中で傷ついたり、学習面で自信を失ったりして、「自分はもうダメだ」という思いを抱きます。そして共通しているのは、「その時に誰にも言えなかった」という点です。子どもはおとなが思う以上に我慢強いのかもしれません。周囲が気づいた時には、すでに自分では修復が難しいほど心が深く傷ついていることも少なくありません。

### 早期対応が必要な理由

そのような辛い思いを独りで抱え込ませないために必要なのが、早期対応です。早期対応が重要な理由はいくつかあります。

まずは、子どもに寄り添うためです。小学生・中学生の頃に抱え

た「自分はダメだ」「どうせ話しても誰にも分かってもらえない」という思いは、放置されると何年も心の奥に積もり続けていきます。早い段階で、「あなたは悪くないよ」「一緒に考えていこう」「あなたはひとりじゃないよ」というメッセージを伝えることで、その後の歩みが大きく変わることがあります。次に、社会とのつながりが完全に途切れる前に支えられるからです。ひきこもりが長期化すると、本来活動する屋間に寝て、夜になって起きだす昼夜逆転になり、それにもない食生活が乱れ、ひとりで食事をすることで、家族との交流も減っていくなど、生活リズムが崩れていきます。これらが積み重なると、社会に戻るための壁が高くなってしまいます。早期に関わることで、崩れきる前にサポートを届けることができます。

さらに、親御さんが孤立しないためでもあります。長期化したケースでは、親御さんが「愛情が足りなかったのでは」「育て方が悪かったのかもしれない」と自信を失い、自分を責めてしまうことがあります。しかし、ひきこもりは家族だけで抱え込むものではありません。早い段階で外部とつながることで、家族の視野が広がると、風通しが良くなり、状況に応じて、適切な距離感で子どもを見守ったり、接したりすることができるようになります。

悩んだ末に「それでも子どもの面倒はすべて親がみるもの」と思い込みすぎず、状況に合わせて選択肢を広げることが大切です。「この子にとって今どんなサポートが良いだろう」と考えることがすでに、問題解決への一歩になっています。

### 子どもが安心して話せる環境づくりを

民間支援団体である当法人の役割は、当事者の気持ちに寄り添いながら、家族と社会の間に橋をかけることです。長期化したケースでも回復の道は必ずありますし、早期に関わることで、その道のりはより短く、より穏やかなものになります。

早期対応とは、「急いで学校に戻す」「無理に外に出す」ことではありません。子どもが安心して、気持ちを話せる環境をつくり、家族が孤立しないように支え、本人が自分のペースで、前に進んでいけるように伴走することです。ひきこもりの背景には、必ずその子どもりの理由があります。その理由に耳を傾け、丁寧に寄り添うことが、長期化を防ぐ確かな方法のひとつではないでしょうか。



## ピアサポーターの対等性を足場に、自律に向き合う ～関わりを続けること、人と人をつなげること



ピアサポーター 鈴木 昌平

### 自分の居場所とは

私がAさんと知り合ったのは、1年ほど前のことです。初めて会った時、不安げでしたが好青年らしい穏やかな雰囲気を持っており、話しやすかったことを覚えています。

来所した理由は「充実感の不足」でした。学生時代の苦い経験もあり、プライベートで満足した時間を過ごせていないと話してくれました。Aさんは就労支援施設に通って、ある程度のお金も稼いでいますが、それでも来所したのは、きっと一言では表せない感情があったのだと思います。当初は施設での人間関係についての相談や、就職サポートなどでしたが、ある時点からAさんの関心は、急速に自らの“居場所づくり”に移りました。

### 試行錯誤から見えてきたこと

居場所づくりについて、ふたりで「あーでもないこーでもない」と相談を重ねたり、居場所ですす飲食代を試算するために複数のお店を訪ねたり……日々が試行錯誤の連続で、今も続いています。そのくらい、さまざまな若者が集う居場所づくりは簡単なことではありません。僅かではありますが、Aさんに変化が見えてきました。

例えば、最初は慎重なところが先に立っていましたが、徐々に心を開いてくれて、自身の気持ちや意見を、より率直に話してくれるようになりました。どんな時でも関わりを続けることで、少しずつ家庭や施設とは違った信頼関係を築けてきています。

私以外の方たちと関わる機会も増えてきました。ひとつには、他利用者との関わりです。先日「ゲーム大会に来てくれたら嬉しい」と言ったところ、当初は迷っていましたが、当日フラッと遊びに来て、持ち前の人懐こさを発揮し、他利用者とは和やかな関係を築けていました。

その後、話をした際には「優しい人ばかりで話しやすかった」と嬉しい感想が聞け、ある種の“良い発見”にもなったようです。今後どのように関係が発展していくのか、とても楽しみです。

ふたつには、さまざまな別の機関・場所で催される居場所活動に参加して、自分の心地良い人間関係を見つけていくことです。不安を隠さずにいたAさんに、当初は同行し、外部の居場所まで遠征しました。ある程度、雰囲気がわかったところで、私は同行せず、Aさんがひとりで参加する、といったステップを踏みます。

結果としてそこは、居場所にはならなかったものの、「〇〇の特徴がある居場所は合わない」「▲▲▲▲性格の人は苦手」というように、「自分を知る」一助になったようでした。

### 心の拠り所を求めて

振り返ってみると、若者が人生の一步を踏み出していくためにはある種の“心の拠り所”が必要なのではないのでしょうか。いざという時に頼りにできる、自分の味方でいてくれる人が身近にいてこそ、若者は一步を踏み出してみようと思うのでしょうか。

何かと忙しい現代の社会では、見知らぬ人との関係はどうしても一時的なものになりがちです。ましてや、何者になるのか。まだわからない青少年に向き合って、関わりを続けようと思う人は少ないでしょう。しかし、このような現状だからこそ若者は最初の一步を踏み出すことを躊躇せざるを得ず、成熟していく道を阻まれているとも考えられます。

彼らと比較的近い立場にある“ちょっとおとな”のサポーターが、ひとりの若者と長く関わりを持つことで、豊かな関係性や社会が広がります。若者の心のなかに、現代ではなかなか見られない“人と人の結び付き”=“心の拠り所”を作っていくことなのかと日々試行錯誤をしています。



## 親の自律について



ピアサポートネットしぶや親の会 小野 美智子

親の会では子どもの自立や自律について話題に出ることがあります。このほど厚生労働省は「ひきこもり支援ガイドブック」を15年ぶりに作成し、寄り添うための羅針盤という新たな指針を示しました。これまでの医療寄りから幅広い現場向けのものとなり、従来の「自立させる」から「自律を育てる」ことを重視しています。自律とは「自身を肯定し主体的な決断ができる状態」ということだそうです。このような変化もあり、子どもだけではなく、親の自律について考えてみたいと思います。

### 親の葛藤

私たちが育ってきた頃の価値観では、今の時代で幸せになれないようです。何が正しいのか誰にもわからず、多くの人が戸惑い、試行錯誤しながら生きています。親の会では、生きづらい子どもや家族との日常で起きた悩みを打ち明け、共有しています。

例えば、自分を後回しにして家族のためにがんばる人、本当は納得していないのに波風を立てないように本音は言わない人、自立して欲しいけど傷つけないように触れない人、自分の中にある葛藤をどうにもできず、同じ道を行ったりきたりする人、何も動けずにじっと我慢していたり、仕事に逃げてしまったりする人……。

親も子どもも同じようなループに、長年はまっているように見えます。そんな親をはじめ、多くのおとなを見て子どもたちは「現実を変えることは無理だ」と、諦めてしまっているような気がします。

### 親にできること

親は子どもたちに何ができるのでしょうか。ずっと家族や子どもの問題と向き合っていくうちに、だんだん気づいてきたことがあります。

それは、私たちは自分を後回しにして、自分の中にある本音、や

りたかったけど、ずっとやれなかったことなど、それを見ないふりしているうちに、本当の自分の気持ちを麻痺させて、わからないようにしてはいないだろうかということです。

私は封印していた自分を、少しずつ解放していきたいと思うようになっていきました。長年、良かれと思って続けてきたことを手放していくことは、とても怖いことかもしれません。過去の自分の行動が、間違っていたと後悔することもあるかもしれません。

それでも自分がやってきたことは、きっと当時の自分にできる最善だったのですが、それは「こうあらねば」という心配や不安からやってきたことでした。

大切な人が幸せであって欲しいと誰もが願っているけれど、残念なことに人を幸せにすることなど本当はできないのだと思います。自分を幸せにできるのは自分しかいない、自分の幸せは自分で責任を取ることしかできないのだと、子どもの不登校やひきこもりを経験して痛感しました。

### 本物の自分であること

親が自分をとことん見つめ、ありのままの自分を許して、受け入れたい。そして好奇心を持って、多様な観点や価値観に触れたい。外側に求められることに従順に伝えていくのではなく、自分の生き方を大切にしたい。どんな場所でも、自然体の自分でいたい。心配しながら生きるのではなく、自分も子どもも信頼される安心のなかで、よろこびを取り戻していきたい……。

自律とは、こうあるべき自分から自由になって、本物の自分であり続けることかもしれません。自分の生き方を大切にするからこそ、人の生き方も尊重し、大切に合わせるのではないのでしょうか。

そういうおとなが増えていくことで、きっと子どもたちにも伝わっていくと信じています。

おとなも子どもも自律して、共に明るい未来を創っていきたいです。



## 早期対応を支える公立中学校の 放課後居場所等と大学生ピアサポーター

ピアサポーター/ 東京家政大学3年 芦澤 生成

### 外国ルーツの生徒との関わりー代々木中学校ピアサポート学習

「国語、79点でしたー！！」と嬉しそうに報告してくれたのは、韓国人のSさん。1年生の頃は、授業には休まず出席していたものの、日本語が十分に理解できないこともあり、学校に慣れず、保健室の先生と放課後補習をしていたそうです。その後、校内居場所で引き継ぎ、現在は毎週、参加してくれています。

とくに苦手だった歴史を中心に、教科書を一緒に読み進めながら、わからない言葉や漢字の意味を確認し、繰り返し学んできました。Sさんにとって、歴史は世界史であり、国語は外国語です。そのような状況で学年平均を上回る得点を取り、みんなで喜び合いました。

試験直後のこの日は、勉強は一旦お休み。習い事や近況についての会話を楽しむ一日となりました。Sさんの努力と、この活動の成果や意義を実感するとともに、生徒との距離が少しずつ近づいてきているなど感じました。

### 生徒が楽しく生き生きといられる場所ー原外カフェ

原外カフェでは、生徒が主体的にそれぞれの役割を担います。生徒たちの息の合った連携は見事で、楽しげな雰囲気包まれます。「原外カフェは楽しい？」とたずねると、みんな笑顔で「楽しい！」と即答してくれました。

また、夏休みの「宿題終わらせるぞ」企画で出会ったIさんとも、原外カフェで再会しました。当時は「あまり学校には行けていない」と聞いていたため、再会を嬉しく思いました。「授業は受けていないけど、給食を食べに行く」と話してくれ、カフェでは生徒ボランティアとして飲み物渡しや声かけをおこなうなど、生き生きとした姿が見られました。ここでの時間が、次への一歩につながっていると感じました。

生徒同士だけでなく、さまざまなおとなと自然に関われるのも原外カフェの魅力です。私自身も明るく朗らかな民生委員の方に声をかけられ、気づけば悩みを受け止めてもらっていました。「楽しく、自分のためにね」という言葉が心に残っています。

### みんなで魅力あるカフェをつくるーはちかふえ

鉢山中学校で行われている校内カフェ「はちかふえ」は、特別支援学級の生徒も参加するインクルーシブな空間です。カードゲームや宿題を通して自然と会話が生まれ、生徒たちとの距離が縮まりました。生徒からは「スタッフと話すのが楽しい」という声もあり、先生や親とは違う立場のおとなとの関わりを求めていることがわかりました。

特別支援学級に通う生徒からは「はちかふえのある日は学校に行くのが楽しみ。この場所ができてよかった。この場所があるのが嬉しい」という声もあり、居場所の存在の大きさを感しました。活動後の振り返りでは、次回に向けた意見交換がおこなわれます。こうした積み重ねが、居心地の良い居場所を生み出していることを実感しました。

### プレ事業「10代のよりみちスペース」で感じたこと

原宿外苑中学校から徒歩2分の場所にあるコミュニティセンターで、初回となる10代のための居場所活動がおこなわれました。子どもたちと遊ぶゲームが用意されていましたが、私自身初めて目にするゲームも多く、事前にプレーし、興味を持ってもらえる工夫をしました。ボードゲームでは生徒と同点で終了し、「また絶対やる！」「決着をつけましょう！」と、次回につながる約束もできました。

また、お母さんと喧嘩をしてしまったという生徒も訪れました。モルックやけん玉、ボードゲームなどを楽しむなかで、少しずつ元気を取り戻していく様子が印象的でした。

帰り際、スタッフが「これで、お母さんと仲直りしてね」とお菓子を手渡すと、少し照れたような笑顔で「うん」と答えて帰っていきました。何気ないやりとりのなかに、居場所の大切な役割があると感じました。

### おわりに

活動に参加するなかで、生徒だけではなく、私自身も温かく見守られていたように感じます。大学生という年齢の近い立場に関わることに大きな意味があります。生徒にとって、話しやすく関わりやすい存在であることや、日常のちょっとした話題も共有できることからこそ、生まれる関係性があると感じました。さまざまな居場所で子ども・若者とおとなの間で、大切な役割を果たしているのだと実感しました。



## 重層的支援事業からひきこもり支援に取り組む ～地域福祉コーディネーターの記録



渋谷区社会福祉協議会/ 社会福祉士 安藤 さなえ

### 地域福祉コーディネーターとは

私たち地域福祉コーディネーター（通称CSW）は、分野を問わない相談や困りごとを抱えた方と地域とをつなぐための「個別支援」と、誰もが暮らしやすい地域づくりをおこなう「地域支援」に日々取り組んでいます。私ども渋谷区社会福祉協議会が令和5年度より渋谷区の重層的支援体制整備事業を受託し、令和8年度で4年になります。

「福祉なんでも相談窓口」では、どこに相談していいかわからなかったり、複雑複合化した困りごとや、制度の狭間で解決が難しい内容など、多種多様な相談に対応しています。そのなかでも、ひきこもりや社会的孤立の課題については、相談先がわからず、ご本人やご家族が相談先につながるまでに葛藤や悩みを抱える期間が長いことも多く、相談から次のステップに進む際にも丁寧な支援が必要であることを実感しています。

### シブヤロコミュ・ひきこもり支援プロジェクトについて

令和4年から取り組んでいる「シブヤロコミュ（シブヤ×ローカル×コミュニティ）」は、地域の団体とともに地域課題の解決に取り組むことを目的としています。プロジェクトのひとつである、「ひきこもり支援プロジェクト」では、若者とご家族を対象に、「渋谷」という地域に根差して活動を続けている貴法人にもメンバーとして参画いただいています。

メンバーとのミーティングを重ねるなかで、ひきこもりを「状態像」として捉え、ひきこもり状態により人や社会につなが「れ」ないこと＝社会から孤立することが問題であることを、メンバーとの共通認識としました。また、ひきこもり状態や社会とのつながりが途切れたところから社会に再接続することが非常に困難であることを背景に、予防的な取り組みが必要であること、地域のなかにつながる先の選択肢が増えることが、孤立感を抱える人と社会がつながる一助となればとの思いから、地域のなかで共に考え、寄り添ってくれる方を増やしていくために、地域住民、地域の団体や行政・支援関係者を対象とした勉強会を令和8年2月に開催しました。多くの方に ご参加いただきつながりを持ってたことが、今後もひきこもりや社会的孤立の課題にアプローチしていく大きな推進力になると感じています。

### 若者に情報を届けるティーンズタウンページの作成

前述のシブヤロコミュ内の「結プロジェクト」から派生して、「ティーンズタウンページプロジェクト」と題した取り組みを行いました。このプロジェクトは、子どもや若者が孤立状態に陥る前に、居場所や相談先、支援団体等につながってほしい、地域のなかには相談できるおとながいることを知ってほしいという思いから、若者世代にとっての情報源であるInstagramやnoteといったSNS媒体での情報発信をおこなうものです。今回は、渋谷区内にある14団体にご協力いただき、区内にある大学のゼミ生のみなさんがインタビューした内容をSNS記事にまとめたものです。

また、参加された団体から、「若者に情報を届ける際のツールにしたい」との声をいただき、SNSに掲載しきれなかったインタビュー内容を含めた「冊子版ティーンズタウンページ」を作成しました。SNS版、冊子版とも、貴法人も掲載にご協力いただきました。  
【note記事】[https://note.com/yui\\_shibuya/n/nde18e431afd5?sub\\_rt=share\\_sb](https://note.com/yui_shibuya/n/nde18e431afd5?sub_rt=share_sb)

### みんなのサポらぶ勉強会等に参加して

貴法人からお声がけをいただき、みんなのサポらぶ勉強会・ミニ勉強会にも参加しました。不登校やひきこもり、地域社会から孤立しがちな若者に、地域のなかでできることを一緒に考える機会となり、子ども・若者に温かなまなざしを送る方々が地域にたくさんいることを実感し、感銘を受けました。

勉強会の参加を通じて、地域の団体、民生児童委員や他自治体の行政職員・私たちと同じCSWの方々と、ヨコのつながりを持つことができたことも、私たちにとって大きな収穫となりました。今後、各地域や自治体での取り組みを参考に、「渋谷」という地域での取り組みや情報発信に、より力を入れていきたいと考えています。

今後も、みんなのサポらぶの4団体を始め、地域に根差して活動するみなさまと、渋谷の地域で暮らす子どもたち、若者たち、すべての住民の暮らしが豊かになるよう、より良い連携を図れますとCSWとして大変心強いです。

## 行政の垣根を越えて

ピアサポートネットしぶや 事務局

## 住んでいなければ、利用できないのか

「渋谷区に住んでいませんが、利用できますか」「東京在住でなくても、利用できますか」など、民間機関への問い合わせでも、利用しようと思う人は、そこに住んでいなければ、利用できないのではと思わせてしまう、そんな何かがあります。

渋谷は交通の要所です。埼玉、神奈川、千葉とも電車で1時間圏内、2時間もあれば、さらに範囲が広がります。住んでいる場所とは違う場所での利用を考えている人たちがいるのが実情です。

## 垣根を超える一歩

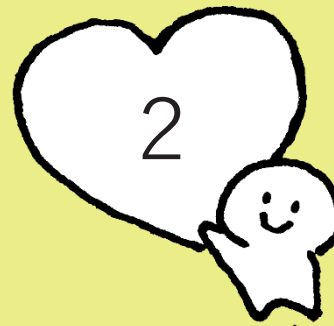
「支援者交流会」という東京都ひきこもりサポートネットが主催する集まりがあります。厚生労働省のひきこもり施策の説明とワールドカフェで支援者間の交流がありました。さまざまな話が飛び交うなかで、ひきこもり当事者会の代表から、「会の運営で、他地域他県からも参加者がいると、行政からの支援が受けられない」という窮状がありました。各自治体は、それは当たり前、どうにもならない雰囲気が漂い、一瞬凍りついた会場。するとある行政職員から、「ウチは、そこの垣根をなくしました」と、支援のあり方に一石を投げ、行政間連携を求めました。

また渋谷区担当者の「渋谷区には専用のひきこもり窓口がない」との発言から、同区の当法人の活動が注目されました。4団体による協働・協創ユニットが運営する勉強会に隣接する新宿区、港区の担当者が参加を検討し、新たなつながりに進展しました。

## 垣根を超えて、役割分担と協働へ

新たなつながりは、渋谷区では、重層的支援体制整備事業をおこなう社会福祉協議会とその集まりに集う団体、港区も社会福祉協議会、新宿では、さまざまな部署や就労支援機関などへと広がり、勉強会は地域を超えた情報共有プラットフォームへと進化しました。

勉強会での学びを通して、当法人が受けた相談を、よりよい支援に結びつけるために居住地の新宿区につなげる機会がありました。担当者との顔みえる関係と支援の実態がわかったからこそでした。行政区分を超えて、それぞれの特性を生かす。一歩踏み込んだ支援へとつながり始めています。



# 子ども・若者の 育ちに関わる 「おとなの話」

子どもを放っておけないと思うおとなたち。  
勉強会、こども食堂、校内カフェ、冒険遊  
び場、プレ事業という現場でのチャレンジ  
の軌跡です



## ミニ勉強会と組み合わせた6回の勉強会の記録



みんなのサポらぶ/みんなの世界テーブル 加藤 美由紀

### 3年目を迎えたサポらぶ勉強会

みんなのサポらぶ勉強会も3年目、のべ400人近い参加者を数え、学びと対話の輪を広げてきました。

学校と家以外の居場所の必要性について認識が共有された初年度。居場所とは「場所」ではなく、他者との「関係性」がベースになることが明らかになりました。子ども・若者を「知る」ことにフォーカスした昨年度、居場所の主体が子ども・若者になるには、子ども・若者の本音を「聴く」という、関わるおとなの主体的な試みが必要になることが示唆されました。

その課題を受けて、今年度は「近所のおじさん・おばさんができること」を通年テーマに掲げました。

サポらぶ勉強会の特徴は、なんといっても現場の生の声を聞くこと。地域の学校の先生にお話をうかがったり、「中高生の居場所がない」という現役高校生の声が会場に響いたり、壇上に上がった複数の大学生との対話から、若者の生きづらさが個別の課題でないことが浮かび上がったこともありました。

今年度は、寄り添いの現場の方々に直接お話をうかがう「ミニ勉強会」を設け、実践者の声に耳を傾けました。

「居場所を考える」ことから「居場所をつくる」フェーズへと一歩を踏み出したサポらぶ。実践に合わせて、勉強会の内容もより具体的に、参加者も支援の現場にいる行政の方や、より実践的な課題に直面している方々が増えてきました。

### 第8回勉強会「おじさんおばさんの知らない世界～中高生の今」

今年度第1回。日本大学の梶野教授より、子ども・若者の「感情リテラシーの乏しさ」とともに、過度な配慮や同調圧力など、常に他人の目を気にせざるを得ない環境が、彼らをさらに追い詰めている現状が紹介されました。育つ世界そのものが変容しているなかで、地域のおじさん・おばさんのような存在が、子どもたちに「世間知」や安心感を与えるような関係性を築くことも、これからの社会に必要な支援のあり方であること、その前提として、

おとな側が思い込みを外し（アンラーニング）、新たな視点で向き合うことこそが、真に若者たちとつながる第一歩になることが提議されました。

グループごとの対話では、「昔はさまざまな感情を吸収してくれる場があった」「おとなが思うことを伝えていないからつながれない」「悪態をつく場をつくる」など、若者が自分らしく感情を表現できる「居場所」づくりに必要な、おとなの変化と理解への第一歩が語られていたのが印象的でした。

### 実践者の話を聞く2回のミニ勉強会

#### ○ミニ第1回

ひきこもり支援とは、支援者がいなくても生きていける関係性へと本人の関わりを広げていく「関係性の支援」である、というお話をピアサポーターさんからうかがいました。ジャッジしない、つながりの種をまく、並走していく、というような「対等な関係をつくるプロセス」が寄り添いである、というお話は、第8回の「まっさらな視点で若者の声に耳を傾ける姿勢」に重なるものがありました。

#### ○ミニ第2回

新宿区や港区の子ども若者支援担当の方々と交えて、10年間ひきこもっていた人が社会に出るのは極めて困難、早期介入の重要性があらためて明確になりました。

連携の広がりや体制整備が求められる一方、地域で気になる誰かにやわらかく関心を向けたり、社会側から声をかけ、選択肢を示していくことも大切で、若者の居場所への期待が多く寄せられました。

### 第9回勉強会「10代の居場所の青写真」を共に描く意見交換

まず「行きたい、居たい場所」として、子どもが選べる多様な居場所の必要性が浮かび上がりました。次に「人」については、「安心できる人や信頼できる人」。新しい関係の最初の一歩を信頼できるおとなが仲介してくれたら、という意見も出され、「おとながつながりおとながつなぐ」連携が求められることも確認されました。

### プレ事業「10代のよりみちスペース」から見たこと



みんなのサポらぶ/みんなの世界テーブル 加藤 美由紀

#### 第10回勉強会「あの人がいるから居場所になる」

居場所に関わる「人」について、参加者の活動や経験のなかからの気づきを共有しました。大切なのは「おとなも一緒に居場所をつくる仲間」だということ。ひとりの「私」として真剣に向き合い、本気で関わり続けるなかで、支える一支えられるという関係ではない対等な関係は生まれ、子どもが変わるきっかけにもなっていくことが語られました。

#### 第11回勉強会「地域で子どもの育ちに関わる」

今年度最後の勉強会は、「子どもを放っておけない」地域のひとりのおとなとして、子どもと関わり続けてきた「こども食堂の名づけ親」近藤博子さんにお話をうかがいました。

おとなが子どもの居場所を奪っている現代、制度ができると人のつながりが切れることもある。ひとつの活動だけで社会は変わらず、町そのものを子どもにとって安心できる場所にする。本来、地域のなかで育つ存在である子どもを、本来の姿に戻すという意思が感じられました。

#### まとめ

「近所のおじさん・おばさんができること」で大切なのは、一人ひとりのおとなが地域で関わり続ける「ありよう」であり、それが集まって町全体が子ども若者の居場所になっていく、そんな道筋を発見することができた1年でした。

特に最後の勉強会では「子ども・若者の居場所になる町」について、たくさんのヒントをいただきました。詳しくは、みんなのサポらぶ/みんなの世界テーブル毛利マズミさんがまとめたnote記事をご一読願います。

【note記事】 <https://note.com/worldtable/n/n23e96c4d7c50>

#### 場所がつながりを生み、つながりが居場所をつくっていく

11/27、SCC千駄ヶ谷コミュニティセンターで、10代の居場所「よりみちスペース」の月1回開催が始まりました。「学校と家以外の居場所がほしい！」という声から始まったこの活動から見たことは、中学生は自由に寄り道ができない、という現実でした。部活や塾で忙しく、放課後も管理されている中学生の現状、「場」へのハードルは思ったより高いものでした。

そのハードルを越え、場につないでいくのは「人」でした。校内カフェやこども食堂でつながっていた子どもが、場所につながり、自分の役割をみつけて居場所をつくる側にまわっていました。

またおとながつくる「居場所」へわざわざくる理由は、彼らにはないということもわかりました。彼らが求めているのは、おとなが奪ってしまった「すき間」や「たまり場」であって、自分たちの行きたいところ、居心地のよい場所に「たまる」。フリースペースを持つSCCは利用するが、その奥につくられたスペースには立ち寄らない彼らの姿が、静かにそれを物語っていました。

一方で「10代の居場所」の意義をこの短期間にも目にすることができました。「若者を服で自由に」を目指すアパレルとのコラボイベントには、80名以上が参加。友達同士で服を選びわいわい楽しんだり、スタッフさんのコーディネート提案で自分を発見して目を輝かせたりする中高生の姿から、学校と家以外で10代が楽しむ時間と空間が地域に生まれたことを感じました。

子どもと場所がつながる機会に、地域のおとなとの接点も生まれました。さらに「10代を放っておけない」地域の団体やおとながその場所に集い、つながりの輪が広がり始めました。

よりみちスペースで知り合った子どもが、町で目が合って挨拶してくれた時、たとえその居場所にこなくても、継続して開催している、そこで毎月続けている人がいるという安心感が生まれているようにも感じました。始めてみてわかること、始めてみないとわからないことが多くありました。

場所がつながりを生み、つながりが居場所をつくっていく。そのために場所をつなぐつながりを、つながりが居場所になっていく工夫を続けていきたいと思います。

みんなの世界テーブル活動報告

### 子ども・若者を育む

～地域のおじさん・おばさんにできること



みんなのサポらぶ/みんなの世界テーブル 奈良 直美

#### はじめに：団体の理念と8年の歩み

2019年の発足から8年目を迎えました。子どもや若者を取り巻く環境は大きく変化しましたが、私たちは「誰もが自分らしくいられる場所」を目指し、歩みを続けてきました。

団体名「みんなの世界テーブル」には、深い願いが込められています。「世界や日本の多様な文化・習慣」を知ること、そして「世代、経験、価値観が異なる他者」との出会いを通じて、世の中には自分とは異なる無数の「世界（観）」が存在することを学んでほしいという思いです。それら色とりどりの「みんなの世界」が、ひとつのテーブル、すなわち「社会」という大きな場において緩やかにつながり、認め合える関係性を築くこと。それが、私たちの活動の根幹にある理念です。

今年度は、重層的支援体制整備事業の一翼を担う団体として、子どもたちが自らの可能性を広げ、地域社会との接点を再構築することを重点に展開した、象徴的な3つの活動を紹介します。

#### 1：自立性と創造性を育む実践

##### ～子どもたちが主役の「献立・買い物・調理」ミッション

これまでの「自分の世界をつくりこよう」というテーマのもと、子どもたちが自由な発想で課題に挑戦し、学年を超えて協力が生まれるのをさらに進め、子どもたちの自主性に全責任を委ねる、より高度なミッションに挑戦しました。

「10名分の食材を、限られた予算(3,000円)内で調達すること」、「他校の児童や初参加の子とも協力し、楽しく食事をおこなうこと」の2つを設定し、子どもたちは、役割を自分たちで決め、献立を話し合いました。仲間の好き嫌いを考慮しつつ、メニューを決定し、予算配分を綿密に相談し、買い物では、価格を比較しながら食材を探し出し、限られた予算内でデザートまで含めたボリュームのある、創意工夫に富んだ食事を完成させました。

#### 2：夏休みのセーフティーネット

##### ～サマースペシャル（サマスペ）による居場所の構築

長期休暇中、家庭や学校以外の「第三の居場所」がどれほど求められているのかという問いから始まりました。10時から20時まで会場を開放し、

予約不要・出入り自由（入退室、記録は必須）という柔軟なスタイルにした結果、多くの子どもが集まり、潜在的な需要の大きさを肌で感じました。

会場内を「身体を動かす」「創作活動をおこなう」「学習やおやつタイムに充てる」の3つのエリアに分けるとともに、習い事や夏期講習に追われる日々とは違う「好きなことを好きなだけできる時間」を大切にしました。大学生ボランティアや地域住民が見守るなか、その日の気分で自由に場所を選んだり、初対面同士が遊び始めたり、一人で静かに創作に打ち込んだりと、過ごし方は多様でした。

#### 3：世代を超えた共生と交流

##### ～大学生および地域高齢者との多世代協働イベント

大学サークルと連携し、子どもたちが、大学生が競技参加のために培った最新の技術に触れる機会と、地域のベテラン世代とのスポーツ交流を組み合わせました。

昼食は、子どもたちがつくったカレーで食卓を囲み、大学生から「美味しい」と絶賛され、他者に認められ役に立てたという経験をしました。

午後は、グライダー制作をする大学サークルのメンバーから、飛行機が飛ぶ仕組みを伝授。飛行理論を生かした紙飛行機づくりとにポッチャ大会をおこないました。大学生の「飛ぶ」ことへの情熱に触れ、子どもたちは目を輝かせていました。続くポッチャでは、地域のシニアとチームを組み、戦いました。腕に覚えのある地域の方々との容赦のない真剣勝負は熱気にあふれ、会場は大いに盛り上がりました。

#### 結び：地域社会に根ざした支援のあり方

改めて確信したのは、子どもや若者を育むのは特定の専門家だけでなく、地域に住む「おじさん・おばさん」といった市井のおとなたちの存在です。私たちが提供しているのは、単なるイベントではなく、多様な価値観が交差する「交差点」のような場です。家庭でも学校でもない、第三の居場所において、おとなが子どもを「教える対象」としてではなく「一人の人間」として尊重し、共に活動する。そのような関係性のなかで、子どもたちは安心して失敗し、挑戦し、自らの世界を広げていくことを学びました。

私たちはこれからも、重層的支援体制整備事業の一助として、子どもたちが自身の「世界」を大切に、他者の「世界」とつながっていけるような場づくりを継続します。不登校やひきこもり傾向にある若者も含め、誰もが取り残されない社会の実現に向けて、地域全体で子どもを育む意識を共有し、活動に真摯に取り組んでいきます。

### 公立中学校の校内カフェを支える 「まちのおじさん・おばさん」



みんなのサポらぶ/民生主任児童委員/原外カフェサロン運営委員会 小林 舞子

#### 小さく大きく

原外カフェを始めた3年前はアフターコロナの時期でした。学校には、地域の人が入りづらい雰囲気がありましたが、民生委員、NPO法人職員、社会福祉協議会の地域福祉コーディネーターと学校とが運営委員となり、はじめました。

また、お手伝いには地域の民生委員有志や、PTAとして一緒に活動してきた青少年対策地区委員長、地域でこども食堂をおこなうみんなの世界テーブルなどのママ友にも声をかけました。さらに原宿外苑中学校PTA会長からも「お手伝いしたい」と申し出がありました。

当初は、親がいたら子どもはゆっくりできないと思い、躊躇しましたが、この学校では、ボランティア制で親同士がつながっていないことを知り、考えを改めました。結果的には、親が子どもの様子を知れたり、先輩ママと子育ての話もできたりする効果がありました。翌年からは「原外カフェPTAボランティア」も立ち上がり、小さく始めた事が大きく広がっていきました。

#### カフェを支えるおじさん

いつも参加してくれるPTAのお父さんボランティアがいます。PTAのママたちや私たちとも仲良く飲み物の準備をしてくれます。特別企画「模型カフェ」のなかで、参加していたAちゃんが「ウチのパパ、お手伝いに来ているでしょ？ プラモデルが大好きなんだよ」と、お父さんを紹介してくれました。お父さんの名札とお子さんの苗字が違っていたので、親子だとわからなかったのです。父と子の何とも微笑ましい場面でした。

#### カフェを支えるおばさん

私が頼りにしている方がいます。優しくてほんわかした雰囲気のある彼女は、いつも仕事を終えてからカフェに来てくれます。彼女は、生徒と関わる時間が短いなかで、いつの間にか生徒に混じっておしゃべり。馴染んでいて、すごいなあいつも思います。

また、仕事を通じた人脈で、地元の企業から寄付などの協力も得てくれます。彼女以外の民生委員も、町会や商店街、地元で協力してくれそうな方に説明し、協賛を募ってきてくれます。それぞれ違った持ち味があるすごい方々ばかり……その力に支えられています。

#### 子どものためはおとなのため

施設の建替え工事がはじまり、居場所活動を終了した方々がきてくれたり、企業の社員ボランティアを募るサイトから参加したりする方もいます。見学も多く、色んなおとなが集まってつながって、コラボ企画も生まれています。カフェでは、子どもだけではなく、おとなにとっても「大事な場」になっているのが嬉しいです。

#### Nちゃんとのこと

まだ中学校1年生だったちょっとおとなしいNちゃん。当時の校長先生と一緒に大豆を栽培して味噌づくりなどを行っていた時に、「Nちゃんに何かできないか？」と話がありました。カフェのお手伝いを提案したところ、友だちと一緒に生徒スタッフになってくれました。チラシの作成やエプロンのデザインなど大活躍でした。しかし中学校2年生の後半からは、顔を見せなくなり心配でした。先生から、今は登校できない子の教室に通っていると聞きました。その後、会えた時は推し活や未来の進路の話をして見守りました。卒業するNちゃんは、今年度最後のカフェに来てくれました。スタッフ全員から「高校合格おめでとう！卒業おめでとう！」とエールを送りました。

「原外カフェは居場所になったかな？」と聞いたら、「はい、とても楽しかったです」と応えてくれました。

帰り際、「また会いたいです」と涙ぐむNちゃんに、高校生になっても私たちはココに居るから、お手伝いに来てと伝えました。

#### 学校だけど、生徒を中心につなげる地域のおとなたちの活動

最後になりますが、4月から新入生が120人を超えて、初の4クラスになるそうです。課題は、カフェで準備する飲食物などを増やさないと足りません。引き続き寄付など協力してくれる仲間を増やさないとけません。これからも、おじさん・おばさんパワーで「原外カフェ」をもっと盛り上げていきたいです。

### せせらぎファンイン・冒険遊び場に 伴走したおとなと若者の四半世紀



みんなのサポらぶ/せせらぎファンイン 冒険遊び場 小水 知映子

#### あそび場づくりは、おとなのあそび場づくりあそび

子どもたちが地域のなかで、のびのびと自由にあそび育っていくのを26年間、「あそび場づくりあそび」をしながら仲間と共に見守ることができました。

「私たちの子どもたちのために何かしたい!」「思いっきり遊べるプレーパークを渋谷にもつくりたい!」。四半世紀前、私と同様に、自分の子育て中に感じた「禁止の看板のない、やってみたいことにチャレンジできる場所」を求めた仲間が集まりました。でも、誰に聞いてもむりむり。でも! 夢や希望を持つのは自由です。実現の道すじだけでもと続け、話し合いは楽しくアイデアに溢れ、公園についてもっと知りたくて区担当者に聞きに行ったり、区内の公園の様子も調査隊ごっこで歩き回ったりしました。

#### 中高生の居場所づくり「ファンイン」との出会い

ちょうどその頃渋谷には、ファンインと名づけられた中高生の居場所づくり活動が誕生します。社教館の貸し出し合間の1時間を交渉。若者はユースパートナーとして、バスケットや卓球したり、子どもと一緒に汗を流していました。おとなと子どものまなかあたりの年齢は、子どもにとって安心だけど刺激的な按配の良い存在です。

こうした取り組みを参考に、私たちがつくる私たちの居場所づくりを始めました。場所を決め、チラシをつくり、若者をゲットし、ひたすら待ちました……しかし、来ない! 本当にだれも来ない。それでも居場所は、そこにある事が大事!と、痩せ我慢の日々でした。また、若者集めも難しく、友だちの輪を必死にたどり、新たな仲間を紹介してもらい、たくさんの若者とつながることができました。

#### 私たちの居場所づくり

この頃の居場所には、学習支援がつきものでしたが、私たちの「学習」への苦手意識の向こうに、のびのびキラキラと子どもたちがあそぶ姿が浮かんできたのです。

「私たちらしさ」って何だろう? 「野外での居場所、四季を感じる自然のなかであそびをつくっていきたい」「ぼんやりする。おしゃべりが止まらない。いつ来てもいい!いつ帰ってもいい!

行けば必ず誰かがいる」ーやがて、居場所づくりとプレーパークづくりに、たくさんの共通点が見つかっていきました。

#### せせらぎ冒険遊び場の誕生

室内の居場所づくりから始まり、月に一回の施設のお庭での「かまどでおやつづくり」を足して、お隣のスポーツ施設の敷地をお借りして、長い休みの度に明日もあそべる3daysを開催するに至りました。見学や冷やかしのいろいろな方が足を運び、いろいろなものもいただきました。予算もなく何もない私たちにはありがたく、物が増えるなかで手づくりの倉庫もつくり、温か味を感じ入るエピソードに溢れた時代でした。

#### 活動から事業へ

たまたま隣接する施設に訪れた新区長や新議員が立ち寄り、「ありがとう! 子どもはわんぱくなくらいがいい」という言葉とともに、新議員の方は、プレーパークは「地域の有志のおばちゃんたちがやっている」と知り、驚愕。しばらくして「この活動は区の事業レベル、青少年育成事業として議会にかけたい。一緒に施策を考えませんか」と連絡がありました。大チャンスですが、大きすぎる話です。みんな悩みましたが、みんなでやりたい。何度となく話し合い、全員で提案書をつくりました。こうして2004年に、渋谷はるのおがわプレーパークが。2022年には、えびすどろんこ山プレーパークが誕生しました。

#### いつもいてくれる地域のおとなの存在

いま渋谷には3つの冒険遊び場があります。運営するのは、地域のおとなたちと専門職としてのプレーリーダーたち。そして、ババやママたちで、雨でも雪でもお休みしない年中無休で遊べる大人気の場所になっています。区が発行する小冊子「渋谷ツナビ」に「僕たちが離れても、プレーパークはそこにあった。だからまた戻ってこられた」という見出しで、区立中学校出身の3人がプレーリーダーとして掲載されています。子どもたちをまるっと見守ってきた甲斐がありました。

今、もっと解放的な地域みんなの広場づくりを目指し、広大な空き地の扉を開きました。

子どもを育てることは、寄り道、道草、迷い道などがあってこそ。地域のなかにおとなのつながりがあることで、子どもたちは自ら育つのではないかと思います。

### 地域とともに育つ「第3の居場所」

#### ～原外カフェが紡いだ物語



原宿外苑中学校 奥井 伸

#### もうひとつの居場所を求めて

原宿外苑中学校で「原外カフェ」を立ち上げてから、4年の月日が流れました。放課後の校舎に、ゆっくりと人が集まり、互いの気配を感じながら過ごす光景は、今ではすっかり日常となっています。しかし、その始まりは決して大きなものではなく、「生徒が安心して過ごせる場所をつくりたい」という、地域からのささやかな願いでした。

家庭でも教室でもない、もうひとつの居場所。そこでは、誰もが役割を背負うことなく、評価されることもなく、ただ「いていい」と感じられる…。このような空気を必要としていたのは、生徒だけではなかったのかもしれませんが。おとなもまた、どこかで同じように、静かに寄り添える場所を求めていたのだと思います。

企画を進めるなかで、「学校に関わってみたい」と声をかけてくださる方が次々と現れました。保護者や地域の方、企業の方や大学生、そしてかつて学校に馴染めなかった若者まで、立場も年齢も異なる人々が同じ場所で同じ時間を共有します。その光景を見るたびに、学校という場の可能性を改めて実感しています。

#### 原外カフェが生み出していること

カフェのロゴは、本校の生徒とボランティアの大学生が共にデザインしてくれました。中学生と大学生が並んで作業し、ときに笑い合う姿は、原外カフェが育んできた関係性そのものです。

スタッフが身につけるエプロンも印象的です。それを制作してくれたのは、かつて不登校を経験した生徒でした。布選びから色の組み合わせ、デザインの試行錯誤を重ねるなかで、「自分にもできることがある」と語ってくれました。完成したエプロンを手にしたときの、少し照れながらも誇らしさをにじませた表情は、今でも忘れられません。原外カフェは、自分自身を見つめ直す場にもなっています。

さらに、企業とのコラボカフェは、生徒たちに新たな価値観をもたらしています。犬と触れ合うことで心がほぐれる時間は、まるでアニマルセラピーのようでした。コーヒーショップのスタッフからは「ホスピタリティとは何か」を学び、相手を思いやる言葉や所作

の大切さに気づくことができました。

また、プラモデル制作では、手を動かしながらものづくりの奥深さに触れ、「工夫して完成させる喜び」を実感することができました。これらはいずれも教室では得がたい学びであり、生徒たちの世界を静かに広げています。

企業の方々も、生徒たちの反応に驚きながら、「また関わりたい」と言ってくれます。生徒の素直なまなざしや夢中になる姿が、おとな側にも新たな気づきをもたらしているのだと思います。こうした関わりの積み重ねにより、原外カフェは「学校の一部」でありながら、「地域の財産」としての存在感を高めてきました。

地域の方々からも、「子どもたちと自然に話せるのが嬉しい」「学校がこんなに開かれているとは思わなかった」といった声をいただいています。学校は、生徒だけでなく地域にとっての居場所にもなり得るのだと実感しています。生徒にとっては頼れるおとなが増え、地域の方にとっては子どもたちの成長を見守るよろこびが生まれます。そのような循環が、ゆっくりと確実に育っています。

教員の間でも、「いつもと違う柔らかな表情が見られる」「地域の方の関わりに励まされる」といった声が聞かれるようになりました。原外カフェは、生徒だけでなくおとなの心にも静かな変化をもたらしています。

#### 学校が起点「みんなの居場所」に

社会全体で孤立が課題となる今、このような取り組みはこれまで以上に大きな意味を持つと考えます。人と人が緩やかにつながり、支え合うコミュニティは一朝一夕には生まれません。しかし、学校がその小さな起点となることは可能です。原外カフェは、その可能性を示すひとつの形です。

原外カフェに加えて、生徒会が中心となってゼロから立ち上げた「原オリンピック」も紹介します。今年には2025デフリンピック東京大会に合わせて、「いろんな人のあたりまえ」をテーマに、共生社会を掲げ、デフ競技を含む体験型イベントを行い、地域住民を含む1,000人を集めました。

原外カフェや原オリンピックは、誰かひとりの力ではなく、多くの思いと手が重なり合って生まれました。これからもこの灯りが消えることなく、生徒たちの未来を照らし続けていくことを願っています。

# 3. 課題を探る

## 2025年度の活動を振り返る



みんなのサポらぶ/ピアサポートネットしぶや 相川 良子

### 期待された効果

子ども・若者世代に関わるこのプロジェクトは、子ども・若者のことが「わからない」から始まりました。勉強会を通して中学校の先生とつながり、地域・大学・企業などと連携し、中学校に校内カフェや校内居場所をつくってきましたが、この間も不登校の増加は止まりません。早期発見が叫ばれるひきこもりへの対応も医療分野と絡みながら複雑化し、これまでの行政の枠組みを超えるアプローチが求められています。子どもは「学校だけでは育たない」ことを改めて共有し、青少年教育の視点から「育つ機能のある居場所」を模索しました。

○ 4団体ユニット「みんなのサポらぶ」構成団体（以下ユニット団体）はそれぞれの活動を軸に、身近な地域で関わる「おとな＝市民」の力を発掘し、つながってきました。

みんなの世界テーブルは、こどもテーブル（食堂）活動のほか、LINEオプチャで「こどもテーブル横のつながり」を構築しているほか、長期休みの子どもの居場所づくりのアクションも進めています。原外カフェサロンでは、民生委員、PTA、町会などにも応援の輪が広がり、カフェに立ち寄る中学生も在校生の半数を超えてきました。冒険遊び場を運営するせせらぎファンインは、都営住宅建て替えを待つ空き地に、つかの間の「遊び場」をつくり、子どもからおとなまで、交流の輪を広げています。不登校、ひきこもりの早期発見、早期対応を手がけるピアサポートネットしぶやは、ひきこもりがちの若者に、校内カフェ、校内居場所などに大学生や企業ボランティアとともに活動する社会参加の機会を増やすため、地域・企業・大学・医療等との連携をつくっています。各団体の持ち味を生かした取り組みが、生活圏のなかに顔見知りを増やし、相談しやすい関係を生み出しているように感じます。

○ 若者世代の見えにくいひきこもりへのアプローチには、行政の垣根を超える情報共有の「場」が役立ちました。

事例検討（ミニ勉強会）を含む6回の勉強会のなかで、近隣区の行政や社会福祉協議会等の取り組みを知ることによって、新しい発見があります。とくにNPO等と民間との連携では、役割分担で協働する仕組みづくりが今後の課題となると思われます。

○ パラリンピックを契機に始まった生徒会主催の「原リンピック」では、地域・企業・学校との協働が生まれ、中学生とおとなの探求の時間でした。

2年目となった今年度の「原リンピック」は、デフリンピックを契機に、共生社会を掲げておこなわれ、1,000人ほどの来場者を迎えるなど、地域ぐるみの盛り上がりを見せました。

○ 中高生以上の子ども・若者の居場所づくりプレ事業「10代のよりみちスペース」が始まりました。

勉強会のなかで何度も繰り返された「中高生以上の育つ機能のある居場所」、この取り組みは、ユニット団体みんなの世界テーブルの呼びかけで「一日児童館」をきっかけに、中学校に近いコミュニティセンターとの協働で始まり、試行錯誤が続いています。

### 残された課題

「子ども・若者のインクルーシブな居場所をこの街に」を課題として取り組んできたなかで、今年度は、子ども・若者世代の居場所が「10代のよりみちスペース」として動き出しました。

この間、とくに強調されたことは、身近な地域で関わる「おとな＝市民」の力です。

○ 「10代のよりみちスペース」が、中高生以上の子ども若者のユニバーサルな居場所となるために、「おとな＝市民」の力を足場に、必要なプロジェクトが動き出すことが基本的な課題です。

○ 市民力を高めるために、街の身近な地域で寄り添うことの意味や居場所のあり方、不登校、ひきこもりの「自律」についてなど、学ぶ機会をつくります。

○ 地域の「おとな＝市民」を、さまざまな活動の担い手とするにあたっては「子どもの人権」についての研修が必須となります。とくに、子ども・若者世代をめぐる多様なハラスメントについて学ぶ機会をつくります。

活動に広がり、深まりが生まれること—そのためにも事例に基づく情報共有を基本に課題に向き合いたいと考えています。





## おわりに

若者世代の生活保護受給者が増えているようです。近年は、大学に行くこととアルバイトは当たり前、高校生の自殺増と相まってこの世代の先行きの不透明さを予感させられることが多いように感じます。物価高や非正規雇用が蔓延する今、ひとり親、貧困、こども食堂等々、もはや民間の善意だけでは解決できないことが多々あることも、勉強会を通して共有してきました。

今年度は、子どもからおとなに向かうこの世代の育ちを応援するために「10代のよりみちスペース」を若者世代の居場所づくりのプレ事業として始めました。こうした取り組みは、社会が培ってきた多様な知見を引き継ぐものとして、行政によって制度化されてこそ根付くと思われまます。

原外カフェ運営委員会、せせらぎファンイン冒険遊び場、みんなの世界テーブル、ピアサポートネットしぶや4団体でつくったみんなサポらぶというユニットの事業は、WAM助成を受け、地域の方々、地域交流センターの管理者、社会福祉協議会をはじめ近隣区の行政の方々、地区民生児童委員協議会、青少年委員、PTA、企業や大学などの協力のもとおこなわれました。

また、デフリンピックを契機に共生社会を目指し協働イベントとして取り組んだ「第2回原リンピック」は、ご意見、ご指導をいただいた中学校の先生方、広報やコンサルタントとして応援して下さった宣伝会議や東洋学園大学広報部、原宿外苑中学校や生徒会、パラスポーツを応援する草の根運動の会・渋谷、東京法務局、渋谷区学びとスポーツ部や福祉部、教育委員会をはじめ各セクションのご協力があったのでした。

みなさまに、心から感謝申し上げます。



編著者

特定非営利活動法人

ピアサポートネットしぶや

2009年より、ひきこもりの状態等で困難を有する子ども・若者支援に取り組んでいます

子ども・若者の育ちに関わる

地域の「おとな＝市民」が担い手となって

2026年3月31日 第1刷発行

装丁・デザイン 毛利 マスミ

編集・発行 特定営利活動法人ピアサポートネットしぶや

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿 4-7-6 KTビル201

TEL：03-6459-3848 <https://peersupport.jp/>

助成 独立行政法人福祉医療機構

令和6年度（補正予算）社会福祉振興助成事業

印刷 株式会社あーす

